

令和2年度 第2回 横浜市新たな劇場整備検討委員会 管理運営検討部会	
日時	令和2年7月8日(水)10:00~12:00
開催場所	横浜みなとみらいホール レセプションルーム
出席者 (敬称略) (5名)	高橋 進部会長(株式会社日本総合研究所チェアマン・エメリタス) 天沼 ひかる委員(横須賀芸術劇場 副館長 公益財団法人横須賀芸術文化財団 業務部長) 内田 裕子委員(経済ジャーナリスト、ハーベイロード・ジャパン副代表) 藤野 一夫委員(神戸大学大学院国際文化学術研究科教授) 山中 隆委員(滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール館長)
欠席者 (敬称略) (0名)	
開催形態	公開(傍聴8名/報道2社)
議題	(1)新たな劇場整備の検討 (2)その他
資料	資料1:委員会名簿 資料2:席次表 資料3:令和2年度第2回横浜市新たな劇場整備検討委員会 管理運営検討部会資料 資料4:(参考)他劇場の収支予算書 資料5:(参考)運営戦略等の考え方

議事内容

1 新たな劇場整備の検討

【高橋部会長】

- まず、議題に入る前に第1回管理運営検討部会の議事録について委員の皆さまに配付をさせていただいております。事前にチェックしていただいておりますが、改めて皆様にご承認をいただきたいと思っておりますけれども、ご異議ありませんでしょうか。

【委員】

(異議なし)

【高橋部会長】

- それでは異議がないようですので、第1回管理運営検討部会の議事録については、これにて確定させていただきます。ご承認いただいた議事録は、今後、委員会のホームページにて公開させていただきます。

- それでは、第2回管理運営検討部会の議題に従って進めていきたいと思ひます。なお、皆さまのご質問、ご意見については後ほどまとめてお時間を設けます。その際発言いただく場合は、挙手をいただき、お近くにありますマイクを使ってご発言いただくようお願いいたします。それでは、資料に沿って事務局から説明をお願いします。

【事務局】

(資料3及び資料5の説明)

【高橋部会長】

- ありがとうございます。それではここから先は委員の皆さまからのご意見、ご質問、コメントを頂戴したいと思ひますが、順序としてまず第1章ポストコロナと新たな劇場整備のあり方とそれから第2章事業計画の見通しの検討について、まず、ご意見ご質問がありましたら頂戴したいと思ひます。
- 皆さまからご意見を頂戴する前に私から、一言述べさせていただきたいと思ひます。今年になってこの委員会が始まったのと時を同じくして、市議会でも劇場に関する議論が行われているということで、その要旨を読ませていただきました。やはり、コロナの感染拡大が続くことで非常に委縮しがちな生活になっている。しかし、こういう時期だからこそ、スポーツとか芸術の重要性を改めて認識するというようなご意見の一方で、やはり費用に対して心配されているご議論がずいぶんあるように思ひます。ごもつともだと思ひます。そもそも私どもの今までの検討ですと、今日もそうですけれども、イメージはだいたい去年から作られてきましたが、では、それに肉付けしたら収支はどうなるのかというところがまだ見えておりません。それに加えてコロナの問題で行政はコロナ対策、あるいは経済の活性化のために多大の財政支出を余儀なくされていくということですから、劇場を作ること、あるいはそこにお金を使うことの意義、あるいは、どのくらい出せるのかということについても、多分市議会でご関心が高いということなのだと思ひます。従いまして、私たちとしてもコロナ禍において、整備の必要性をきちっと補強していくとともに、事業計画の見通しについてより今まで以上に踏み込んで積極的に検討を進めていくということが必要なのだろうと思ひます。また、委員会として説明責任を果たしていく、そして市民の皆さまの理解を深めていただくということが必要だと思ひますけれども、そのことについて早速当局から動画配信に取り組んでいただけるということなので、非常に良い取組だと思ひます。政府の審議会でもなかなかこういう会議を動画として配信する事例はないと思ひます。議論の要旨だけしか出していないところもあります。それに比べると全部動画で撮られますので、発言を逐一全部伝えられます。そういう意味では、縮めていない、より生の議論をお届けできるということで、非常に評価をして良いのではないかとと思ひます。

こういう議論を1人でも多くの市民の方に伝えていきたいと思います。

- ・ 市としては、ワークショップなども予定されていると伺っていますけれども、やはりこういうご時世で、密な状態を避けないと、ということで、なかなかそのワークショップの方法が見出せないと伺っております。引き続き市民の方の理解を得るためにワークショップが、どういうやり方があるのか検討をしていただいて、何とか市民の方々の議論を深めていただければということを変更して思う次第でございます。
- ・ すみません。冒頭から私の話が長くなりまして。それでは、意見交換に入りたいと思いますが、先ほどもご説明がありましたように、去年の段階で一応、イメージというのはある程度できておりますので、本部会ではプロの方がお二人いらっしゃいますので、プロの目から見た感想、評価、あるいは実現可能性についてのコメントなり、今日は忌憚ないところを頂戴できればと思います。おそらく、段取りとしては、今日、様々なご議論を頂戴して、その上で次回以降、今日の議論を元にしてさらに事務局に肉付けをしてもらって、より数字と言いますか、具体的なイメージに近づけていく、そんな段取りかと思っておりますので、今日のご議論、よろしくお願ひしたいと思ひます。どなたからでもどうぞお願ひできればと思ひますが。

【天沼委員】

- ・ はい、まずは、ポストコロナの件ですけれども、現在劇場を運営しているわけで、非常に大きな影響を受けています。私どもの方の劇場というのは、少し財政的なシステムが特殊でございまして、チケット収入ですとか、貸館の利用料収入、そして劇場の下に駐車場もあるのでございますけれども、そういった収入をあてにして事業を組んでいくということで開館当初から始まっておりますので、それでお察しの通りお分かりだと思ひますが、今のように基本的に公演がまったくできなくなってしまう。自分たちの主催公演ができないこと、それから当然、貸館もございませぬ。ただ、横須賀市の場合は、コロナの関係で開催ができなくなってしまった方々に、すべて貸館料をお戻ししているのです。そういった形で進んでおりますので、今、中止の発表もしておりますけれども、今年度の事業全体の見直しをしなければならぬという状況になりました。
- ・ 今回このコロナの状況というのは、人類にとって初めてのことでございますけれども、どうやったら公演ができるのか。色んな団体が頑張つて実証もして、クラシックが最初にもう公演を始めました。7月、8月になりますとミュージカルのコンサート形式が多いですけれども、そういったものも始まるということで、こうやったら安全だろうという設定の元に、色んなことが始まります。

- 今後の展開としては、このコロナに関しては、何かしらワクチンなりができることで、まったく同じことが起こったとしてもインフルエンザのような形になることは予測され、それがいつかは分からないですけれども、ただ、そういったことが起こった時にたとえば、劇場の経営としてもどうしたら良いのかということが、今回モデルとしてできると思うのです。ただ、一番大事なのは、やはりそうなった時に、予告なく来るわけですので、劇場とかそういったものに対する支援が、たとえば、市なり、県なり、国なりというところでどこまでできるのか。
- ドイツはまずアーティストに対して、劇場に対して支援するというをおっしゃりましたが、つい最近、やっといギリスの方が各劇場に支援をするという声明を出したと思います。ただ、すでにコロナが始まって時間が経っているので劇場が非常に多いイギリスは、すでに破綻している劇場もたくさんあるということも聞いております。その支援もどこまで含めるか分かりませんが、そういったものが当たり前という言い方はおかしいですけれども、そういったものとして多少あるということと、あと劇場としても、多少その資金力というか、そういったものを持つべきだなというふうに思います。色んなシステムがありますので、実質どこまで、公益財団法人のルールというものもございまして、できなくなった時に耐えていける状況というのを、作っていくというのが、今後のことなのだろうなということをしみじみ感じながら、私どもも主催公演としては10月に大劇場の方で能とオペラの連続上演という少し大きいものをいたしますけれども、安全対策をきっちり取ってやっていくつもりです。
- ただ今回、コロナのことで、劇場で行われることが生で配信されたりですとか、あとは、無観客で上演されたものをオンデマンドで後で見られるという、そういう新しい方法が、技術的にも凄く格段に上がったということで、今後、チケットを買って中で観るお客様と生で配信されているものをそれよりも安い金額で鑑賞されるお客様と、ということで公演を行っていくという形態ですとか、更に幅広くお客様を得られる、そういう新しい環境もできたのかなと思っております。ただ、実際、生で劇場に来るお客様、生を観る価値観というのが簡単に配信で観られるようになったことで、どのように変わるのかというのは分からないのですが、生で観ること自体がものすごく高級なことになってしまうかもしれませんし、ただすごくそのあたりは新しいこととして、とてもポジティブにとらえていけることだと思いますので、特にこれから新しく劇場ができるとすれば、そういったことにホールの設備として対応できるような、そういったこともあると良いのではないかとこのように思っています。

- この7ページにあります、第2章の事業計画の見通しの検討ということで、検討委員会の方でおまとめになった事業の内容の方向性ということで、アからカまでのものがありますけれども、こちらは劇場として非常に重要なポイントでございまして、どこに重きを置くのかということで、基本的に劇場の特性というのは決まってきますし、戦略的にどうやっていくかということがどうなるかということで、この項目について何をどうするかということをお細かく検討していくのだろうと思っています。最終的にその資料5の方で、具体的にプログラムの割合ですとか、数が出ているのですけれども、これはですね、バレエ・オペラのプログラムを例えば5割にするということ自体が基本的には不可能ということではなくて、公演自体をどういった形式で行うかということで多彩なプログラムを用意することもできますし、そのあたりについてはもちろんお金の話もありますけれど、いろいろな形でできると思います。それはたとえば、7割に増やすということに関してもどういった方法でそれを実演するかということは1つの形ではないので、こういった形でバレエとかオペラを盛り上げていくということは可能なだろうなと思っています。
- ただ、その演目についてその次の3の大まかな事業の特性のイメージのところ、具体的にその演目の数が出ているのですけれど、これは現状、できる演目についていろいろと制限もありますし、そんなにたとえばオペラでもバレエでも簡単にできないものもあるので、実際存在する演目とは、というところ、実現性みたいなところから考えていかないと、少し数だけでは難しいのかなと。
- やはり、供給過多みたいなにならないことがすごく大事だということもありますので、あとはそのプログラムをどうやって補完していくのかというのは、今、スタンダードで古典の作品があって、今だともう古くなっているのでしょうか。60年代、70年代、80年代につくられた作品がスタンダードになってきているものがある、新しく生まれてくるものについて、やはりサポートするか自ら作り上げるかということをしていかないとですね、たとえばバレエ1つにしてもオペラ1つにしても未来のためにやるというのではなくて、やはりどういうものが観たいとか聴きたいとかというそういう要望について、応えていくところと人間の創造性みたいなところですかね。そこでつくっていくということは、非常に大事なことだと思いますので、数が具体的にたとえば1年間日数が365日しかないので、招聘物をやった時に例えばオペラが1カ月かかるとか、そういった物理的な割合からどのくらいの公演ができるのかということも実は割り出せるかなと思いますけれども、それに加えて実質の内容について実現性と、細かいのですけれど、各バレエ団によってすべての作品が上演できるわけではないので、上演権とか、振付師が許さないと上演できないとか、結構厳しくいろいろあります。

オペラなんかですとそこは少し外れるんですけど、現代の作品に関して言えば、たくさんハードルはありますので、そういった部分を含めて1年のシーズン何をやるのかというのは、たとえば、パリ・オペラ座でもロイヤル・オペラでもそれはホームページを見ればラインナップは分かると思いますけれど、いろいろとその上に決められていることで、必ず新作というのは入っていますので、そのへんの検討も必要なのかなと思いました。

- それから、収支とかにも関連してくるんですけど、図としては、その次の4の収支の考え方の部分のイメージの中で、オペラ・バレエがあって他の優れた芸術もやっていこうという部分になりますと、もちろん全体の経費的な問題もあるので、シーズンで使わない日程がたとえばあるとすると、そこをその貸館とすることで収入を得ることはできます。何をするかという部分については、劇場にふさわしいものというのを選ぶということができると思います。すべて主催でやる場合ですと、たとえば宝塚にしても歌舞伎にしても当然、公演について支出しなければいけないわけですから、そこまで範囲を広げるかどうかというのは、まず、今後、メインの部分をしっかりやっていく上で広げていくのか、1つ素晴らしい劇場を作るとですね、そこで公演をされたい方というのは、プロでもアマチュアでもたくさんいらっしゃることは確かです。使っていただくことで劇場を愛してもらえることもあるので、そういった点からも貸館については考えて良いのではないかなというふうに思います。大まかでざっとした感じですが、以上でございます。

【高橋部会長】

- ありがとうございます。最初にコロナがらみでウィズコロナ、アフターコロナ、ポストコロナですか。それについては、まさに劇場をしておられる現場の生の声を頂戴したと思います。私がさらに感想を申し上げるわけでもないですけども、今回のことをきっかけにデジタルなどを使って配信するということが、層が広がっていくということが大事なのかなという気がしています。今、プロスポーツは、無観客でやっていますけども、あれはあれで観ていて良いんですけど、やはり生を観たいと思います。ですから、層が広がってその人たちが生を観に行くっていう、そういうポジティブなプロセスを作れていったらコロナを乗り越えることに繋がるのかなと思います。
- それで一つ私素人なので教えて頂きたいのですが、プログラムで戦略的に考えた時に5割なり7割は、形式を上手くすることでできるとおっしゃいましたけれども、多彩な、とおっしゃっているのは具体的にどんなイメージを持てば良いのでしょうか。

【天沼委員】

- 1つオペラというふうに大きくジャンルとして今、まとめられておりますけれども、そのオペラ自体をつくっていつている、たとえば二期会ですとか、藤原歌劇団があり、そこにまた招聘のオペラがあり、そしてもっと裾野を広げると、それぞれ都市にオペラを実際に定期的に上演されている団体の方もいらっしゃるの、そういった方も含めて広く考えると例えばこれは生々しい話ですけれども、たとえば主催として自主公演ですと、そのすべてについて全部お金を出すという方法もありますし、そのお金の出し方というのをそれぞれ分担するという方法もあります。
- あとそれから、よくありますけれども、劇場を無料でお出しして公演自体をその方たちのリスクでやっていただくとか、そういったことで色んなことが実現をいたしますので、すべてが全部主催で全部お金を出すっていう方法でなくても良いのですけれども、それをどうやって組んでいくかということは、非常にそれぞれ皆さんやりたいことがおありになって、全体的にそのプログラムを作ろうとした時にそのへんはいろいろと大変なことはあるとは思いますが、それはできると思います。

【高橋部会長】

- ありがとうございます。あと、もう1つのコメントで重要だと思いましたが、やはりそのプログラムのラインナップ、そのものの実現性ですね。ここはぜひ事務局で他の劇場が、オペラそれからバレエですね、どんな演目で具体的に構成しているのか、そのへんを見ていただければ実現性がある程度分かると思いますので、これを宿題にさせていただきたいので、次回以降またご用意いただければと思います。
- 他の方がいかがでしょうか。

【藤野委員】

- 私の方からは、むしろなぜこのコロナの時代、あるいは、ポストコロナの時代にこれだけ大きな劇場を作らなければいけないのかという、その必然性について大状況、マクロな点からお話をさせていただきたいと思います。今日、事務局でお示しいただいた5ページのところに表がついて非常に分かりやすいのですが、コロナによって変わる価値観と変わらない本質とがあります。フェーズによって色々変わってくる。考え方として新しい価値観が出てくるということが書かれています。ただ、その新しい価値観が具体的にどういうものかというのは、まだ答えのない問いの段階です。でも、これは後で出てくるブランディングの考え方も含めて非常に重要なポイントだと思います。

一番下のところに本質というところがあって、本質は、今はちょっと休眠状態だけれども、本来の価値は変わらないのだと、私もそう思いたいタイプなのですが、ただその芸術文化の本質的な価値というのは、本当に皆が合意する形で了解されているのかどうかということも不安です。ですから、もしかするとこの芸術文化の本質的な価値というのも、今回のコロナを踏まえて新しい価値観と混じり合うことで再生される可能性がある、変化される形もあるのではないかなという感じがします。普通は底辺にある普遍的で変わらないものと時代と共に変わるものというふうな考え方なのだが、そういう二元論そのものも組み替えなくてはいけない状況になるかもしれない、そのくらい大きな変化がきているのではないかと考えています。

- まずコメントが2点あります。1ページ目のポストコロナの新しい劇場整備のあり方のところで、アクチュアルな問題ですが、偏見や固定観念にとらわれずにより一層幅広い視野で物事を考える力が必要となる。私もこういうことを前回お話させていただいて、本当にここがすごく重要だと思うのです。ウィズコロナの時代に、国境が閉ざされてしまっています。特に経済レベルでの相互依存関係が制限されています。冷戦構造が崩壊して以降、グローバル経済の中で格差社会の問題が残念ながら出てきましたが、経済的な依存関係でかろうじて世界平和が保たれてきたという実情はあったと思います。ところがその人、物、資本の移動、交流というのは今、制約されている中で色んな面で内向きになってくる。自国ファーストが出てくると。
- しかし、情報だけはインターネットですから、国境の境目なしにどんだんなみなみと私たちに押し寄せてくる。しかしこの情報というのは曲者で、例えばGAFAsのような巨大情報産業というものは帝國的な大きさになっています。それからAIの加速によって、様々な疑似情報が作られていきます。いわゆるフェイクの問題が出てきます。そうすると、私が一番恐れているのは何かというと、問題は、その情報が真実なのか、作られたフェイクなのかを判断する手立てがだんだんなくなってきてしまうということなのです。本物を実感している人たちだったら、これは偽物だっという判断の基準はいつの間にか身につけているのだけど、これからの世代は、もしデジタルから発信されていたら、本物と照合する機会がどんどん失われていくわけですから、これはもう判断ができなくなる。つまりネットの情報が、直接見聞きできるものではなくて見知らぬもの、例えば外国からの発信である場合には、その情報が正しいのかフェイクであるかということ、自分の目と耳で確認する、あるいは五感を通して体験して「これは正しかった、あるいは違っていた」ということを知るチャンスが、どんどん私たちから奪われていきます。これからの社会は、監視社会の強化にプラスして、本当に私達の日常的な知覚そのものが変わってしまう、非常に危機的な状況になるのではないかなと思っています。本当に深刻に受け止めていることで、だからこそ、僕は芸術文化、アートが必要だと思うのです。

- アートを通して国境を越えた交流であるとか連帯というのが育まれていくなれば、このフェイクに騙されないような人間の主体性、主体的な判断能力というのが相互に培われていく。特に現代アートというのは、社会の様々な問題を暴き立てるような批判的なものが多かったりする。それは嫌だなどと思う人もいるかもしれないけど、そのことによって隠されている裏の真実も知ることができるわけです。そうして、フェイクに踊らされない、情報に操られない人間、そして人間社会ができていく訳だから、ますます芸術文化や文学とかが担う役割が凄く重要になってくるというのは大状況としては想定されます。だからこそ私は、劇場が一番今、不可欠だというように考えています。
- それからもう一つ、前回のヴァイツゼッカーさんの言葉をまた今回も繰り返して頂いて大変うれしかったのですが、問題は今劇場を作るという時に、市民的な議論の盛り上がりというのはどこまで可能なかということなのです。というのは、例えばドイツの場合には、こういう状況にあった時にいろんな支援をするのは当たり前だと社会的に合意されます。アートだとかアーティストは社会の生命維持装置だというようにちょっと誇張された言い方もされていますけれども、衣食住と同じくらい重要だというのは、簡単に合意された。その背景は簡単ではない。美的体験と大きな議論のプロセスを経てそういう合意が成り立ってきているわけです。つまり、子供の頃から、政治家も、企業の人たちも、一般の人たちも、芸術文化に触れる経験をたくさん持っています。自分たちの人間形成にとって芸術はなくてはならないものだから、今失われて本当に寂しい、そしてこれは絶対に伝えなくては行けないという思いが、みんなそこで1つになるわけです。だからそれを代表して政治家が芸術文化への支援を約束する。それが力強いメッセージになって、全体の大きな動きになる訳です。ところが、日本の場合は残念ながら、特に戦後においては芸術文化が公的に支援されるということが実に悲しいほど少なかったわけです。
- そういった中で、例えば滋賀県とか兵庫県は県立劇場ができて、オーケストラを使って全員、子供達に生の素晴らしいものを鑑賞させるということができているわけです。だから、こういう子たちがいる県は、20年後、僕は安心だなと思ったりするのだけど、でもこれは格差があって、例えば残念ながら大阪府市は、全部そういう予算を削ってしまったわけです。20年後に芸術文化の大切さとか芸術文化について議論する大人がどれだけ生まれてくるかということが問われている。現時点で、芸術文化を本当に大切なものだと思って育ってきた市民がさほど多くない中で、そういう人たちがどのくらい議論に入ってくるかということを考えた時に、今すぐに議論しろと言ってもなかなか難しいと思うのです。やはりごく一部の人の議論にしかならない。(いまからしっかり子供たちへの芸術体験の提供を始めても、幅広い市民的議論が成熟するには20年以上かかる。)

ということは反対に考えれば、今、これ、もしかしたらトップダウンだっというお叱りを受けるかもしれないが、今先行投資をして立派な施設を作り、そして中身も素晴らしいものを作って、特に子供たちに様々な舞台芸術の本物を味わってもらおう。そしてその子供たちは20年後この劇場を支える一番のサポーターになるはず。しかし、今それをやらなかったら、20年後にも芸術文化が大切だと思ふ大人、あるいは芸術文化について議論する市民というのは生まれな思ふのです。

これは鶏か卵かの問題なのだけ、それで言つたならば、どちらがより賢いか、日本の社会、あるいは横浜にとって重要かという、今決断して先行投資をして、そして20年後にしっかり芸術文化を通して素晴らしい感性を持ち、それと同時に理性的な判断をできる大人たちを作ることの方が重要だと。だから、市民的な幅広い議論とは、何をもって幅広いというのかは難しいのですが、そういった人を作るために今先行投資をするということの方が、僕は重要なのではないかなと思つています。

【高橋部会長】

- ・ ありがとうございます。財政支出とも絡む訳ですけれども、コロナの対策のためだけに財政支出を使わなくては行けないというご議論もあるかもしれませんが、今お話があつたように、横浜として将来世代に何を残せるのかということ考えた時に、今は厳しいけども、今の財政を使って投資をしていくという意味を改めておっしゃつたのだと思つています。

【山中委員】

- ・ 今、藤野委員がおっしゃられたことにちょっと具体的に補足したいと思つたのですが、みなさんのお手元にホールの子事業という一枚ものを配らせて頂いています。いわゆる文化芸術の大切さは、なかなか理論的に言つても伝わらな思つたのですが、これはうちが毎年県下の小学校をホールに招いて、京都市交響楽団のオーケストラと、うちが抱えております若いオペラ歌手、16人の声楽アンサンブルが子供達と一緒に歌うという1時間ほどのプログラムに、本来対象は小学生なのですが、不登校の子については中学生の方も来ていただいています。というようなことで中学生が来たのですが、今まで、不登校で帽子とかマスクが外せなかつたのです。ところが、声楽アンサンブルのメンバーが隣に来て一緒に歌つたら、翌日から帽子もマスクも外して登校して来たということで、先生も驚かれて、報告書が上がつてきたという事例。その後、無事に高校にも進学ができたというような報告を受けております。

- やはり、子供達にとって音楽というか、芸術文化というのはこれほど影響を与えるのだという事例として紹介したのですが、今は残念なことに、コロナで今年はこの事業ができてないのですが、代わりに声楽アンサンブルは小学校の校歌を自ら歌ってCDにして、プレゼントするというをやっています。彼らも暇ですから今集中的に県下の小学校の校歌を歌いまくってプレゼントするというをやっております。僕は、本質的にこのコロナがどうのこうのということで、ベースのものというか、劇場のあり方が変わるというふうには思っていない。
- この1ページの観客のところ、鑑賞意欲の低下というのが1番下のところに書いてあるけど、ちょっとこれ違和感がある。うちは7月から、中程から再開してくのですが、ソーシャルディスタンスということで、客席を半分にしますけども、それでもすごく売れていまして、小ホール公演などは大ホールへ移したりしてやるのですが、びっくりするほど売れています。みなさん、やはり渴望されているのだと、実感しているところです。
- 少し時間的余裕もあるものですからこれからのネット配信に備えて、『神々の黄昏』というオペラをネットで配信しましたが、あの時は外注業者に頼んでそういうことをやりましたが、これから恒常的にやっていくためには自前でやらなきゃいけないだろうと思って、今回線を太くするとカメラを購入すると、うちの舞台技術部というセクションの者が配信技術を磨くために、実際に声楽アンサンブルを使って今配信をしております。配信していくためには、アーティストの方との契約も見直さなくてはならないのでなかなか大変なのですが、声楽アンサンブルのオペラとか、声楽アンサンブルについては、そういう必要はないので、どんどん配信して技術を磨いて、ゆくゆくはこれも1つのビジネスモデルにしていきたいなと思っています。
- 私が思うのはうちのびわ湖ホールというのは建物じゃなくて、やはりそういう演奏を地域の方々に届けていくというのがあって、地域のホールへ出かけていくとか、小中学校へ出かけていってということにすごく力を入れています。今はそれができなくなったので、今度はネットで皆様に届けていくということで、第3のモデルになるのではないかなというふうに、今はそれに力を入れているところです。
- 今回の、素晴らしい計画だと思うのですが、1つわからないのが、オペラ、バレエに力が入られると、総合芸術ですからそれはもう当然で素晴らしいお考えだと思うのですが、あとは伝統芸能とかが出てくるのだけど、うちで言うと、大中小と3つのホールがあるのです。いったいどういうホールを作られるのか。1つホールを作られるのか。

- うちの場合、大ホールはオペラ・バレエ用、コンサートもやるために音響反射板というものを引っ張り出したりというので、かなり大掛かりな装置を作っています。コンサートもやられるのかというのがわからない。あと中ホールとか、小ホール。中ホールは演劇用、それから歌舞伎・狂言のために作ってあるのですが、残響の時間とかで、いわゆるコンサートをやるのと、伝統芸能をやるのでは全然違うのです。歌舞伎や狂言とかお芝居については中ホールで、残響が1秒くらいのホールに設定していますし、大ホールの方は2秒ちょっとくらいあるものになっています。小ホールは、市民の方がお使いになるようなピアノの発表会とか、またプロについては室内楽とか、そんな感じで最適なものに分けて作っているというところがあります。その辺が、どうされるのかなというのがわからない。
- 横浜市には、周りに素晴らしいホールとかありますから、うちの芸術監督の沼尻が初めて作った『竹取物語』というオペラについては、このみなとみらいホールで演奏会形式でやらせていただいたのが世界初演です。あとはベトナムの方へ行ってオペラとして初めてやりました。だから、他の劇場とのすみ分けというか、その辺をどのように考えておられるのかなというのが、これから検討していく際には1つ重要なところではないかなと思います。
- それと、お金のことを随分、海外物のバレエとかオペラを呼んだらどうなの、どれくらいかかるのだろうとか色々、心配されているみたいですが、おそらく横浜というこの立地状況なら貸館で十分やっていけるので、1円もかからないのではないかなと私は思います。ただ、問題は自主制作をどれくらいやるか、演奏家を抱えるのかどうかです。大きな劇場だと、かなり大きなオーケストラを抱えたり、兵庫芸文だったらPACっていうオーケストラを抱えています。うちは声楽アンサンブルを抱えているけど、若いアカデミー的な要素で抱えれば、これは安くつきます。うちも、そんなに彼ら彼女らに払っている訳ではないです。もちろん最低賃金くらいは払っています。その代わり、すごく本番に出られますから、すごく喜んで、全国からオーディションで、30~40倍の難関を突破してうちに入ってくる。
- 僕は、そういうアカデミーのようなものを抱えられるのが、やはり横浜市としては、将来に向けては1番良いのではないかなと思う。実演家を抱えるというのは、やはりこれからこの劇場の成果を市民の方に還元していく上で、子供達に還元していくとかそういうことを考えれば、必須のものではないかなと思う次第です。ざっと見させて頂いてそんなことを感じましたので言わせて頂きました。

【高橋部会長】

- ありがとうございます。いくつかご指摘がありましたけども、現時点で、事務局として答えられるものについて答えていただければと思います。

【事務局】

- ・ ありがとうございます。順不同ですけれども、まずはホールの考え方ですけれども、先ほど山中委員の方にも触れて頂きました、みなとみらいホールというのが、一応音響にこだわって、大ホールと中ホールもあると。そういう中で、何にこだわるホールにするかということになると、やはりまず我々の考え方としては、バレエ・オペラがしっかりできる劇場にしていきたいと思います。また、今までの議論の中では、リハーサル機能とか練習機能をしっかり作った方が良いと言われていまして、それをホールと考えるか、あるいは移動式の椅子をつけたりして、それで練習機能というような作り方もあるし、そこは一概にホールというふうに決めつけなくても良いのではないかという議論もございまして、今の計画の中では、2,500席程度の大ホールということで、その他の音楽機能については当然みなとみらいホールもございまして、またみなとみらいの中にも所々、色々な発表の場ができておきますので、そういった中でそれぞれが特徴を持って連携していくことが良いのかなというように、まだスタートの議論ではございますけれど、今はそういう風に考えているとこととでございます。
- ・ 2点目がですね、さきほどの演目数、プログラム数が多い少ない、この実現性ということがございました。去年もそこはだいぶ議論させていただいたところがございまして、その中で、先ほどの山中委員と天沼委員が最終的に共通する部分になるのですが、やはりフランチャイズなのか、あるいはカンパニーという言葉なのか。実演団体との関係を、連携をどのように強化するかによって、やはり最終的に自主演目の数がどれだけになるのかということが決まってくると。そこに当たっては、各委員ご案内の通り、日本の場合はそれぞれの民間の活動として育ってきたバレエ団であり、オペラ団というものがございまして、その活力ということを大切にしないといけない。ただ一方で、ましてこういうコロナといったような時代の中で、彼らもやはり経営基盤の強化あるいは、安定して発表できる場を作っていきたいという思いもある中で、どういう劇場サイドと実演団体の関係を作っていくのかというのは重要だと思っております。逆にいうとですね、そちらの関係をこちらが待ちの姿勢であれば、何も発展はないだろうということで、前回の第1回の検討委員会の資料では、言葉だけではあるのですが、「新しいパートナーシップのあり方」をしっかりと考えようと考えております。そういう中で、去年20というのを叩き台で出させていただきましたけれども、通常であれば、20というのはなかなか難しいと。しかしながら、ここに拠点として構えてくれるところがあれば、そういったことは大いにあり得るのではないかとこともございましたので、そういったこともぜひこれから議論をさせていただきたいと思っております。途中の段階ではございますが、私どもの今考えている状況ということで、この話題についてもまさにこれからの部会の中でも是非もんで頂ければと思っております。以上です。

【高橋部会長】

- ・ 「新しいパートナーシップ」というお話が出ましたけれども、その辺のあり方と演目、それから財政的な基盤ということも全部繋がってくるわけです。ですから、その辺の肉付けをぜひ次回以降お示しただいて、この場にあげていただきたいと思います。

【内田委員】

- ・ 芸術の重要性というのは、諸先生方からご説明があったと思いますので、私は経済の側面からお話したいと思います。まず、この劇場に対して最初、高橋部会長から市議会でも色々議論がされているというお話がありました。そのご懸念というのは、非常に理解できる場所であって、税金を監視するという役割を持っていらっしゃるわけですから、皆さんのお立場上そこが気になる点であることは想像できるわけですので。そこはやはり私どもがですね、ただ単に税金を使うだけではないのだ、本当に素晴らしい劇場を作ることによって、経済効果が生まれるのだということを、しっかりと示していく必要があると思うのです。そのあたりが、今は曖昧というか、抽象的な議論になっている。もちろんまだ始まった段階なのでそういうところがあるのだろうということです。
- ・ 私もこの委員を受ける前の説明のところ、ただ箱物みたいなものをポンと作るのだということであれば、私は乗りませんよと、お話は受けませんよと。それは違いますと。今回本当に横浜市が作りたいのは、パリ・オペラ座であるとか、ウィーンの歌劇場であるとか、ミラノのスカラ座であるとか、世界中の芸術をたしなむ人たち、そうでなくても、その名前を聞けばわかる、ぜひその劇場に行ってみたい、見てみたいと思うぐらいの引き寄せる力、一流、本物であるというのがわかる、そのようなレベルを目指すのです。これは、横浜に作るというよりも、日本に作るというレベルです。言い換えると、日本一の劇場を作るんだと、そういう意気込みでおられるというようなことをお伺いして、それは素晴らしいと、それは本当に価値があることだと。先進国の中で、世界の人が聞いてうんと頷く劇場が日本にはないというような意味においては、つくことは非常に価値がある。そういう、国の文化度を象徴するものが都市にある、という効果がどれだけになるのかということを試算してお見せする必要があるのだろうと感じています。それは、我々の宿題ということだと思います。
- ・ あとコロナという点で考えた時に、もちろんコロナを考えることは非常に大切であるし、先ほど天沼委員からもお伺いしたように、今、現場の方達のご苦労というか、劇場や演劇界が危機的な状況にあるということは私も理解している訳です。でも、このコロナに関しては、まだ確証がないのです。未知のウイルスであって、もしこれが全て解明できていけば、とっくにワクチンや、処方薬ができています。

- まだまだ分からない、エビデンスがない。今みなさんが装着されているようなマスクですらも、あまり意味がないんじゃないかという議論が出始めているくらい、確たるものがない中で、コロナ対策を前提に考えて、劇場を考えていくとか、収益構造を考えていくとてなると、1年後とか2年後とかに新型コロナウイルスの実態がわかったときに「あの時、みんなでマスクしてたのは一体何だったんだろうね」ということも起こりかねない。今はまだそのような状況であるということを冷静に受け止めるべきなのかなと。ソーシャルディスタンスも大事だと思いますけれども、それを考えた結果、予算が非常に増えてしまうとか、座席数が減ることで収入が減ってしまうということまで配慮するのは時期尚早だと考えています。日本の劇場は椅子が狭くてもうちょっと広ければ良いなというのは日々感じるころではありますけれども、それはエコノミーがグリーン車クラスになれば良いなという程度で、そこまで今から神経質にソーシャルディスタンスを考える必要はないと考えます。
- パリ・オペラ座であるとかミラノ・スカラ座であるとかウィーン歌劇場だというようなレベルを目指すということであれば、もっと長期的な視点ですね。彼らは100年以上かけて素晴らしい劇場のブランドを作ってきているということを考えて時に、何十年先を見据えて、価値をつくりあげていくか、長い視点を持って考えていく、価値というものを創造し育てていくということだということを、共有していくということがまず大事。その価値の共有こそ、前向きにこの劇場の議論に向かえるという一つの前提になってくるのかなと思います。こうした芸術の効果というのは、ここは藤野先生のご専門ですけれども、例えば直島なんて、小さいただの漁村の島でしたよね。それが目利きによる本モノの芸術を揃えることで、世界中の芸術ファンが詰めかける、押し寄せるという現代芸術の島になって、芸術祭なんかも開催できるというような場所になり得る訳です。その芸術が持つ可能性、引き寄せる力、フェアネスであるとか、平和の象徴であるとかというのは、いろいろな社会問題を超越する、本当に普遍的なものであって、そういうものを持つ都市というのは、世界中からリスペクトされる。是非そこはしっかりとみなさんで、市議会の方にも理解をしていただいて、本物の芸術を展開する劇場は横浜市に長い目で見たら非常に良いものをもたらすのだということを、納得していただき、共有していければ良いのかなと私は考えています。
- また、このページにあります「新しい価値観を取り入れながら」という、新しい価値観という点ですね。本当に、新しい価値観というのは難しくって、我々はある意味「新しいことを考えよう」という、このベースになっているこの思考が既存のものであるという矛盾があって、やはり本当に新しいものというのは、まったく違うところがあるものと想像するんですけども、あえていうならここは経済的な視点でもありますけれども、とにかくデジタル化です、これはもう必ず進んでいくはずで、ここで世界的な合意でデジタルの進化をやめようねというようなことはもはや考えにくい訳です。

- そういう中で、デジタルトランスフォーメーションの流れは、芸術の世界でも、劇場をつくるにあたって、新しいキーワードになってくると思います。公演の収入ということを考えたとき、どうしても公演数×座席数で、収益っていうのは出てしまうわけです。これがこれまでの劇場の縛りだった訳です。どうにも拭えない現実だった訳です。でもこれが本物か偽物かっていう議論もありますけども、バーチャルリアリティというテクノロジーがどんどん進んできていて、本当に素晴らしいミラノであるとかニューヨークであるとか、そういう劇場と、横浜の新しい劇場が提携をし、新作が出た瞬間に一緒に、オンラインによる、バーチャルで劇場の中で同じ臨場感をもって同じ作品を楽しめるというようなことができたり。あとは日本中、世界中の人が横浜から発信される芸術をリアルで共有できるとか。そうなった時に、座席数を超えた収益の可能性というものが生まれてくるわけです。これが、新しい価値観のひとつだと思います。
- そういうものに、果敢にトライアンドエラーでチャレンジしていくのが横浜なのだと。新しい劇場は横浜がチャレンジングな街であるのだということを内外に知らしめる拠点にもなり得る。こういった挑戦は他の施設でできるのかというと、なかなか思いつかない。それくらい、芸術作品というのは様々なものを乗り越えていく可能性があるのです。ICT、デジタルトランスフォーメーションの中で、全てが繋がっていくと。IoTですね。全てのものごとがITで繋がっていくという中で、劇場も今までは閉じた世界でしたが、どんなふうに色々な物事と繋がっていけるのかというのは、非常に私は興味があります。芸術のイノベーションっていうものを横浜はやってるよと。そんなことをやれば世界中から注目される。みなとみらいはですね、研究開発の拠点になっていて、様々なテクノロジーの企業が集積していて、ここで新しいイノベーションを起こそうと躍起になっている訳です。そういう人たちと組んで、ぜひ劇場のIT化、デジタルトランスフォーメーションをやってみようという企業と連携するのも、非常に面白いし、盛り上がると思うのです。そういうものが、横浜ならではの、このみなとみらい周辺ではできる。非常に可能性があるなと思っています。
- あとは今、分断されている世界っていうことが非常に懸念されていて。次なるキーワードはやはり多様性ですよ。横浜も、SDGs未来都市宣言っていうのをやっているように、アフターコロナ、ポストコロナの中で、人間の価値観として重要になってくるものは「多様性」であるということ。多様な価値を尊重するというのが、尊いものだなということになってくるわけです。そういう中で、横浜に素晴らしいバレエなりオペラなりといった拠点ができて、そこで是非横浜でやりたいと、アジア各国の優れた若手のダンサーであるとか、演者であるとか、奏者であるとか、そういう人たちが多様に集まってきて、横浜の劇場に行くと本当の意味での多様性、ダイバーシティというものがアートの形で見えるんだというようなことをやってみると、本当に素晴らしい。

- ・ そういうことで、世界と繋がるというデジタルトランスフォーメーション、そしてバーチャルリアリティーなどのテクノロジーのイノベーション、そして多様性というその3つのキーワードが、横浜の新しい劇場に取り入れられていくとなると、これはビジネスチャンス。そういうような視点で考えていくと、非常に可能性が大きく広がっていくんであろうというように感じています。

【高橋部会長】

- ・ ありがとうございます。私もついでに申し上げますと、日本は、どうもインバウンドだとか集客とかっていうことについて、オリンピックを全部ピークにして考えている。でも、オリンピックの後については、全く思考停止になっているのです。ところが、イギリスはロンドンオリンピックをやった時に、そこがピークではなく、オリンピックの後にGREATキャンペーンというのをやって、イギリス自体のブランド力を高めてインバウンドをさらに増やしていくという戦略を取りました。ですから、イギリスはオリンピックの後さらにどんどん観光客が増え続けているのです。足元に引き直すと、確かにコロナの問題がありますから、インバウンドが激減しています。しかし、いずれこれはポストコロナの時代になっていくわけで、その時には、ソーシャルディスタンスという話も変わっているかもしれない。私たちはその時に備えて、日本としてのブランド力、あるいは横浜としてのブランド力を作っておくことはすごく大事で、そうすると、黙っていたとしても、インバウンドが復活した時には日本に行きます、横浜に行きますということになると思うので、そのための準備を今からやっつけていかなくてはいけないってことなのかなということを、改めて感じました。
- ・ 時間を超過していますが、3つ目ですね。ブランドということについて少しご意見を伺えればというふうに思います。私は、首都圏の劇場でブランド力って言われたときにどこがあるのだろうと考えると、どうでしょう。私の個人的なことというサントリーホールかなと。新国立、あるいは東京文化会館は、確かに名は知られていますけれど、ワクワク感とか行ってみたいという意味でいうと、サントリーです。なんでかという、あそこは聞いたら、音響効果が良いとかということもあるけれど、演奏家が是非あそこでやってみたい、それからあそこに行くとなんとなくハレの日じゃないですが、自分の気持ちも変わります。そういうワクワク感を抱かせられるようなものが、多分ブランドを構成している大きな要素なのではないかなと思います。改めてみなさんのご意見があればお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

【藤野委員】

- ・ 事務局が書いていただいたブランド戦略について、私自身は基本的に賛成です。ナイトタイムエコノミーというのは非常に重要だということを考えています。ただ、どうも比較的従来型のマーケティング、ブランディング戦略の考え方にとどまっているのではないかなという感じもします。申し訳ありません。歯に衣を着せぬ言い方で。
- ・ と申しますのも、先ほどからウィズコロナ、アフターコロナで新しい価値ということが言われています。これは明らかに僕は変わると思います。その時の新しい価値を発信するということを踏まえたブランディングである必要があるのではないかと思います。例えばヨーロッパの劇場へ行くと、宮廷社会時代からの古い劇場の多くは、ファサードにこう書いてある訳です。「真・善・美のために」。これ、ギリシア以来の理念です、真・善・美のために劇場はあると書いてあるんです。この真・善・美、僕はその普遍的な価値というのは重要だと思うのですけれども、戦後のドイツで言われていたことはこれだけでは不十分だと。実際に真・善・美にあずかれる人というのは一部のエリートに過ぎないと大きな批判が出てきました。

それでどのように書き換えるかについて色々な提案があるわけですが、例えば真・善・美のためにということプラス、「民主主義と自由と国際平和のために」という劇場のモットー・理念を掲げるというようなことが出てきています。そのように考えると、今の新興国、中国・アジアや中東というところならばステータスシンボルとして新しい劇場を立派なものを作るのは当たり前起きていまして、そういったところと都市間競争しても全然意味ないのです。社会や経済の成熟の段階が全然違いますから。

- ・ そうすると、成熟した民主主義国である日本における劇場のブランディングとは何なのか、もしブランディングという言葉を外すとしたらならば、都市の顔としてのシンボル性、ランドマーク性というのは一体何なのかということをもう少し前向きに、まさに新しい価値観で提出していく必要があると思います。いわゆるセレブのための社交用としての、19世紀的な劇場観では幅広い市民の支持は永久に得られません。むしろ支持は失われていくだろうというのは、明らかな訳です。だから「敷居が高い」とか「文化の殿堂」といったキャッチフレーズは先進国では時代遅れです。

例えば劇場法にはっきり述べられていますが、劇場は「市民の広場」にならなければいけません。「世界の窓」にならなければいけません。すごくやさしい言葉で劇場法は語っています。確かにこの劇場は、基礎自治体とはいえ、とてつもなく立派なものになるわけですから、ほかの自治体の市民の広場とは、少し意味は違いますが。しかし新しい価値で先進国の成熟した社会で、様々な経験をした日本だからこそできるブランディング、都市のシンボル性というものを積極的に打ち出す必要があると思います。

例えばドイツの劇場は、先ほど申し上げたような教養のあるエリートや特権的なものであるという状況を克服するために、本当に長い年月をかけて様々な努力をしてきました。キーワードとしては、一方に「文化の民主化」というのがあります。ハイカルチャーを幅広い人にどのように普及させるかという考え方です。でもそれだけではダメだということに気がつくわけです。もう1つは、「文化的民主主義」、カルチュラル・デモクラシーです。つまり文化を通して本当に民主主義を根付かせる、だからこそ文化政策は社会にとって必要だという合意が1970年以降にはっきりしてきたわけです。それが今のドイツの強みになってくるわけです。

ただ単に高いところにある文化を庶民に降ろすような啓蒙主義的な上から目線では限界があるということに、ドイツは早い時期に気がついているわけです。そうした先進国の文化政策の変遷に基づいて、劇場の戦略と価値観というのがあるわけですから、そういったものを踏まえて、横浜は考えていくべきだと思います。つまり全ての人々に開かれた公共劇場というのはどうあるべきなのかという考え方です。

例えば、ドイツの席割りを見ると、2,000席の大きなホールや劇場の場合でも5ランクに分けたとします。1番安いランクは1,000円で見ることができます。1番高くても1万円です。それが2,000席だったら、5ランクで400席数平等に分けられます。

日本でしたら一番安いE席が50席、あとは2万円のS席ばかり、みたいな本当に不平等な分け方です。でもドイツは劇場そのものが民主主義を体現しているという考え方で、劇場に行くと自分は民主主義社会の中にいるということが実感できる場なのです。そこが決定的に違うので、セレブの人とかエグスクルーシブの場ではないということが基本としてあります。

- ・ 私が海外研修でベルリンへ学生を連れて行くと最初にすることがある。学生ではなくても30才まで有効のパスがあります。「ベルリンクラシックカード」を学生に買わせませす。10ユーロで買うと、そのカードを持っているだけで1年間オーケストラは8ユーロ、バレエやオペラは10ユーロ、最前列の一番良い席、つまり1万円の席で30歳までの若者は最高の舞台芸術に触れることができるわけです。そうやって若い時に1番良い経験をして、でも働き始めたらちゃんと定期会員になるよ、という文化が出てくるわけです。そのように、やはり劇場というのは成熟した民主主義を体現する、みんなが民主主義と表現の自由と多様性を実感できる場だという価値観でいかないと、これからのブランディングはできないのではないかと考えています。

【高橋部会長】

- ・ 大変重要なお指摘を頂戴したと思います。今の世界を見回してみると、ポストコロナで1つ重要なことは、さらに世界が分断されていってしまうということです。米中の争いを軸にしてどんどんブロック化していく懸念があります。今日は政治の話をする場ではないですけど、その中で中国がITも使いながらより統制国家的な色彩を強めて、排他的になっています。一方でアメリカは民主主義を守っているかと言うと、アメリカも自国第一主義で閉鎖的、ブロック化を強めています。そういった中で、おそらく日本とそれからヨーロッパあるいは中国以外のアジアが、より開放的に世界をもっと良い方向にしていこうということで動ける主体だと思います。そういう中で日本の経済外交とかは非常に重要な役割を持ってくると思います。私はまさにその中でこの劇場があるということ、そういう視点はものすごく大事なのかなと改めて感じました。

【山中委員】

- ・ びわ湖ホールについていえば、市民の方から「滋賀県で唯一おしゃれができる場所なので、改修にあたってはそこを気をつけてください」とよく言われます。15%ぐらいいるかな、首都圏の方、横浜のお客様も多いですけど、首都圏と同じ演目があるなら、びわ湖で見たいと。琵琶湖の水面が見えて、オペラの幕間に、ロビーに出るごとに風景が変わっていく、その中でシャンパンを飲むとかそういう感じです。でもまあ宿泊費を使って新幹線代を払ってよく来られますね。ヨーロッパに行くよりはうんと安いです、とおっしゃる。経済効果でいえば、そういう宿泊もあるし、近所に西武百貨店があるのですが、店長としゃべっているとオペラがあると服は売れますと。皆さん着ていくところがないので買わないのだけれど。残念ながらその西武百貨店も閉店しちゃうのであれですけども。
- ・ 建物の話になりますが、市民にとって、公演がない時でもホールに来られるというのが重要だと思っています。うちのホールは通り抜けができるようになっています。山手から来て湖岸に通り抜けができます。その通り抜けのところにレストランとかコーヒーが飲めるところがあります。公演がないと入れないという劇場が結構ヨーロッパでもありますが、やはり市民の方に親しんでもらうには、公演がなくても普段から劇場の雰囲気に入れるというのが重要なことだと思います。それから子供たちをホールに招待すると、一面大理石で目の前に琵琶湖が広がりますので、一步ロビーに入った途端に、ワーンと歓声があがります。横浜の立地ならそれが可能だと思います。ぜひそのような感じの劇場にしていいただければ良いなと思った次第です。

【内田委員】

- ・ ブランディングというところだと思うのですが、やはり大事なのは、他と競合しないというか、唯一無二のスタイル、ビジネスモデルを作るということで、ここも既存の思考から、いかに脱するかというところだと思います。やはり振付師のベジャールの踊りって、見た瞬間ベジャールの振り付けだなとわかるような、らしさというのがあるわけです。ですので、やはりブランディングにおいても、いかに横浜らしさというものを全てにおいて醸せるかということだと思います。例えば、どういう言葉かわかりませんが、「横浜スタイル」というキーワードがあったとします。横浜シティーバレエ団か何かかわかりませんが、そういうバレエ団をどこかフランチャイズで常設して、きてもらうとします。それで、「あの人のたちの踊りは本当に横浜スタイルだね」というようなものが、時間をかけて、だんだん伝わっていくようなものを追求していく、つまりこれは横浜って何だろうというようなものを掘り下げて考えていくことで、そのコンセプトが演出や振り付けなどにどんどん染み渡っていくことをしていくと、それがユニークネスとなり、面白いねということになり、価値となり、ブランドとなっていくのだらうと思います。私も横浜イノベーションという本を書いた時に言ったのですが、横浜が何を指すのかと考えた時に、横浜は日本の中でももっとも歴史が浅い都市です。海だった場所ということで、他の都市と同じような伝統なり歴史なりを追いかけても意味がない。では、横浜の武器はなにか、それは新しさです。伝統に縛られない分、柔軟に状況によって変化できるのだということが横浜の強みなのだと思います。そういう世の中を明るくする、新しいものをどんどん発信するんだというクリエイティビリティが、横浜スタイルになり得るのかなという風に思ったりするわけです。そういうコンセプトをしっかりと共有することで、ブランディングをしていくができればとても良いのかなという風に思っています。

【高橋部会長】

- ・ ありがとうございます。他にご意見ございますでしょうか。

【天沼委員】

- ・ 先ほど藤野先生のお話をお聞きして、これから考えると現実的に新しい劇場をここ以外にできるのかと考えます。新国立劇場の立場は、そもそもやはり劇場というものをオーソドックスなシステムでするところが日本にはなかったわけです。それがやっとできたというその存在で、そのこと自体はすごく非常に大事なものだとは思いますが。ただ今やはり時が経ち、新国立劇場もできて20年経っています。その中でこれだけ世界も激変して、色々なことが起こっている中で、その新しい考え方とかというものが反映されるかということ、あそこは根本的な基礎を守っているところだと私は思っています。

- ・ そうではなくて、もう少し良い意味で新しいこと、それがみなさんにとって良いこととして返ってくるような、そういったことができる場所としてこの劇場の可能性が、恐らくこれから作っていくからこそあるのではないかと思います。みなさんが平等に芸術を享受できるということも良く言われるのですが、本当にシステムとしてドイツはできあがっています。しかし日本の中では本当にそういうモデルはあまりないですし、さっきおっしゃったS席ばかりという、そういう現実です。お金的にもそういったことがやはりできていないわけです。
- ・ たくさん超えなくてはいけないハードルはありますけれども、そうやって生まれてきた新しい考え方というのを実践できる場所というのが、本当に重要だと思います。横浜の界限にはITの会社がたくさんあります。そういった方から一緒に応援をしていただく形というのは、具体的な話になれば当然協賛とかいう形で、新しいプロジェクトとかを本当に組める。逆に言うと全然他にない立地条件でもあります。ですので、その有効性というのにかなり特化した運営方法でも良いと思います。ただベースとして使われるのは、舞台芸術が使うということです。舞台芸術というものをそれでどうしていくのかというのがとても大事だと思いました。私たちの横須賀市みたいに小さいところになると、逆にいうとすごく整備の整ったオペラハウスの中で、ビジュアル系のロックコンサートが行われていたり、色々なことがされています。しかし、オペラハウスの仕様にお客様も喜び、またアーティストにも大変喜ばれています。少し奇妙なことかもしれませんが、そういった意味ですごく愛される劇場にはなっていますし、それはそれでということになります。ただここはこれから作るからこそ、本当に何か色々なことが大事だなと思いました。そしてその可能性をすごく感じるというか、絶対できます。環境がそういう風に整っていると本当に思います。ぜひそういったことももとに、色々なことをこれから検討して、もちろんできることできないことあると思いますが、やっていけることが良いなと感じました。

【高橋部会長】

- ・ ありがとうございます。ブランドだけではなくて、全体を通してさらに追加で何かご意見があればお伺いしたいと思います。いかがでしょうか。

【内田委員】

- ・ 先ほど言い忘れました。例えば貸館で、ミュージカルや宝塚、歌舞伎を呼ぶというところで、これをどうしていくか、どうしても空いている時間を埋めていかなければいけません。そのように他の劇団やプログラムを呼んでビジネスとして成立させるとかということ、もしくは素晴らしい劇場ができればそこでやりたい、やらせて欲しいというようなニーズもあります。

それは非常に素晴らしいですし、そこを目指すところだと思います。しかし、単にそれをやってしまうと、やはり他劇場と同じになってしまうという懸念があると私は感じます。やはりこのご時世で本当に横浜が気合を入れて、一流の劇場をつくるということであれば、何かのフェイクではなく、やはりどこにもない劇場を作るということになる。そうであれば、やはりそういった既存の作品をただ呼んでやらせるということではなく、そこにやはり一工夫あって一緒にコラボレーションなり、新しいものを一緒にクリエイトするという必要があると思います。横浜でやる宝塚はどんな新しいものになるのか、さっき言った横浜スタイルではないですけど、宝塚を横浜スタイルに料理したらどうなるのか、あとは歌舞伎を横浜スタイルに変化したらどのような演出になるのか、そういうものが横浜の劇場でしか見られないということ、そのクリエイティビティみたいなものに挑戦していくということが、横浜の劇場のブランディングになっていって、話題性みたいなものも非常に出てくるのかなと思っています。そういうところも突き詰めてチャレンジしていくという覚悟も必要なのかなと思っています。

【高橋部会長】

- よく女性は宝塚に見に行かれますけど、東京でもやっているのになぜあちまで行くのだろうと考えると、劇場だけではなくて周りのこともあると思います。おっしゃるように、もし宝塚を横浜でやるのであれば、横浜的な宝塚って何と思われれば、向こう行かないでこっちに来ると思います。おっしゃる通りだと思います。
- それでは、予定していた時間もきていますので、今日はこのぐらいにします。私からまとめを若干させていただければと思います。今回はポストコロナの時代に向けた劇場が果たす役割、新たな劇場の上演ジャンル、プログラム骨子に向けた方向性を検討しました。また新たな劇場がもたらす価値についても、もたらす価値ではなく作り出すべき価値と言うべきでしょうか、みなさま方から様々なご意見を頂戴しました。事務局から示していただいた大きな方向性について特にみなさまから違和感はなかったと思いますので、今日色々と頂戴した貴重なコメントをもとに、これからさらに肉付けしていくという作業にかかっていくことになると思います。
- 次回に向けて私から4点確認したいと思います。まず1つ目は、第1章で議論したポストコロナと新たな劇場整備のあり方について、基本計画部会および検討委員会とも共有して、今後の取り組みに向けた議論を進めていただきたいと思います。
- 2つ目は、プログラムの骨子に向けた議論の中で拠点化のお話が出ました。これ非常に重要なポイントだと思います。運営戦略を検討する上で、拠点化というのは極めて重要なところでございますので、次回以降しっかり議論したいと思います。事務局も準備をお願いしたいと思います。

- ・ 3つ目が次回の部会では事業内容の検討に向けて、今回いただいた参考資料あるいはコメントをもとにして、どのように議論していくか事務局でしっかりと事前に検討をお願いしたいと思います。
- ・ それから4点目です。ブランド化ということですが、今日非常に重要なコメントを頂戴したと思います。新しい価値観、大きく大局観としての価値観をどのようにブランドに込めるかといったことと、横浜スタイルとおっしゃいましたが、まさにそういう発想、それから横浜の置かれた環境を活かしながら劇場運営というシステムを作っていく、その作り方の中にもブランドが現れてくるといことだと思えます。若い人たちを教育していく、あるいは横浜に集う企業の協賛の出方にもブランドが現れてくると思えます。そういう意味で、今日いただいたブランドは素材としては良いですけれども、もう少し検討の余地があると思えますので、ぜひこのブランド化ということについて、事務局としてももう少し考えをまとめていただければと思います。
- ・ 以上、私からの今日の取りまとめとさせていただきたいと思えます。委員のみなさま、いかがでしょうか。そのようなところでよろしゅうございますでしょうか。ありがとうございます。
- ・ それでは、最後に私からお願いがございます。検討を深めるために委員のみなさまには議論の参考になるような資料があれば、ぜひとも事務局に提供をお願いできればと思います。それでは、進行を事務局に戻したいと思います。

【事務局】

- ・ 長時間のご審議、誠にありがとうございました。色々宿題いただきました。次回部会の日程につきましては、また今後調整させていただきますので、改めてご連絡をさせていただきます。よろしく願いいたします。それでは、以上を持ちまして第2回横浜市新たな劇場整備検討委員会管理運営検討部会を終了いたします。誠にありがとうございました。